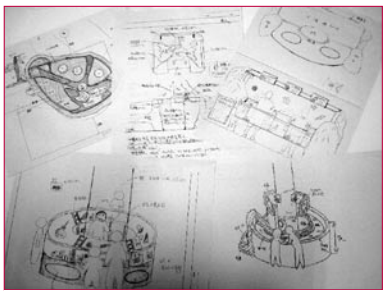
学芸員が語る、新竹島水族館の魅力

3月18日にリニューアルオープンした竹島水族館。
今号では、リニューアルの舞台裏と新竹島水族館の見所を水族館の小林龍二、戸舘真人学芸員が解説し、水族館の新たな魅力に迫ります。

さわりんぷーる（小林）

皆さんから以前より要望が多かった、生き物を触ることができる「タッチング水槽」を作ろうという話が出て、5人の飼育員が自分の考える水槽図をそれぞれ、いらない紙の裏に描いたのは今から2年近くも前のことでした。5人の描いた5つの水槽図を融合させて1つの形にまとめてでき上がった理想の水槽予想図は、業者に見てもらったら予算を大幅に、といいますか予算の倍以上の建設費用がかかると言われてしまい、あっけなく海の藻屑（もくず）となったのでした。


5人の飼育員が考えた水槽図の下書き

そこから全員の絵を再びかき集めて、これは残したい、取り入れて欲しい、というところをできるだけ採用して再度設計。期限ぎりぎりまで、毎日撤去される回遊水槽前でここに新しくタッチング水槽ができるのか、と思いながらメジャーを持ってウロウロしたり腕組みしたりして、図面を書きました。もともと場所が狭いから広くて大きな水槽ではなく小さな円形の中をグルグルと魚がずっと回りながら泳いでくれる「回遊水槽」があった場所。そこにタッチング水槽を作るには倍の面積が欲しいくらいで、狭い空間に飼育員たちの理想を盛り込むのは非常に苦労しました。腕力主義なので、最終的には飼育員たちの要望を一つずつ図面へ入れ込んであとは設計者の私のオリジナルで作り、強引にこれで行きます！と言って作られたのが、今回でき上がったお客さんが生き物に直接触ることができる自慢の新水槽。「さわってごらん」を三河弁にした「さわりんぷーる」と名付けました。

「さわりんぷーる」はスゴイ！（小林）

生き物に触れる水槽は皆さんからかなり要望が多かったものの、こういった水槽は以前から全国の水族館に結構あって、同じじゃつまらん、ということで、他の水族館にはないポイントをいくつか盛り込んだのですが、結果的に我ながらスゴイものができたのですよ。

どこにでもあるタッチング水槽は海岸のヒトデやカニ、ヤドカリなどが触れる磯場の雰囲気を出しているのですが、竹島水族館が考えたのは、なんと「深海魚」に触れるタッチング水槽。冬場から春の初めの期間限定で実施します。

深海の生き物に触れる全国唯一の水槽「さわりんぷーる」

実は深海の生き物は、ジュゴンもジンベエザメもマンボウもセイウチも飼えるような飼育技術になった水族館業界が、新たに目をつけているゾーンの生き物たちで、今もっともホットな生き物たち。